

クルリンと ほしぞらさんぽ 9月号



毎晩雨ふりで星も月も観察できませんでした

今夏こんかの気象は、夕方まではカンカンに照っていても日暮れ頃から雲が広がってはげしい雨になってしまう、そんな日ばかりだったように思います。8月中はとうとう晴れの夜がほとんどなくて、星空散歩ができませんでした。地球温暖化のためらしいので、これでは来年以降も夏はあまり期待できないのかなとも思ってしまいます。とすれば、ほしぞらさんぽは秋から冬に期待しましょう。

9月の空に見つけたい星々は

西の空に低いうしかい座のアルクトゥルス（なんとなく赤っぽい、0等、37光年）、南のさそり座のアンタレス（これも赤っぽい、1等、550光年）、天頂近くではこと座のベガ（0等、25光年）とわし座のアルタイル（0.8等、17光年）とはくちょう座のデネブ（1.25等、2600光年）。つまり夏の大三角ですね。

東の空にある明るい土星（9月は0.6等ぐらい）その右下にある1等星はみなみのうお座のフォーマルファウト（1.7等、25光年）。そして北極星（2等、430光年）も確認しておきましょう。

夏の大きな三角がまだ天頂に 秋の見どころ

星空散歩するとびっくりしますよ。夏の大きな三角が頭のとっぺん（天頂）に見えているではありませんか。夏の大きな三角は実は冬になっても見えているのですよ、いつごろまで見えるか調べましょう。夏の星座さそり座は2時間もすると西に沈んでしまふけれど、さそり座のアンタレスが見つかるでしょう。いて座の南斗六星なんとろくせいも見えるし、天頂で見にくいけれどもいるか座やや座（矢座）といった小さい星座も見えていますね。それどころか春の星座の中の一等星、うしかい座のアルクトゥルスまで、まだ西の低い空に見えていますよ。

夏の大きな三角の東側には、大きな大きな四辺形が見えてきました。他の星座にくらべて格段に大きく、そのつもりで探さないと気づかずに見のがしてしまうほどの四辺形です。これはペガサスの四

辺形と呼んでいて、ペガサス座は秋の星座で

す。さて次は北を向いて見上げると、北極星よりずっと右手には斜めにWの形でカシオペヤ座が、左手の低いところには北斗七星が、どちらもはっきりと見えていますね。このように北極星をはさんでカシオペヤ座と北斗七星が並んで見えるのは秋だけですから、スケッチしたり写真に入らないか工夫したりしてみましょう。

北極星はどれでしょうか。北斗七星もカシオペヤ座も北極星を見つける手がかりになることは知っていますか？ また、双眼鏡がある人はカシオペヤ座の周りを見てごらん、細かい星がいっぱい見えているでしょう。天の川だからですよ。

9月の星空はなかなかにぎやかですね。おまけに南東にはひとときわ明るく見える1等星？まで。これは今はみずがめ座にいる土星で、明るさは0.6等ぐらい、よく知られている土星の輪は、今はとても細くなっています。土星は、ある程度大きな望遠鏡で、しっかりした架台に乗せたものでないと見えませんので、子ども科学館の観察会クーデの日（9/14-土）に見せてもらいましょう。

天の川は…？

夏休みには星空散歩のチャンスがありませんでしたね。夏が過ぎてしまったので今年は天の川が見られなかったな、なんて思っていないですか。天の川は7月だけ見えるのではなくて、真っ暗な夜空ならばほぼ1年中見えるものなのですよ。

次ページの国立天文台の図を見てごらん。中央を横断するように白っぽくなっているのが天の川ですよ。秋になっても天の川は見えているのですね。もちろん空が暗い場所でないと見えませんが。秋に見える天の川は南よりも西に傾いています。

お月見 中秋の名月ちゅうしゅうのめいげつ

江戸時代まで使われていた昔の暦こよみ（旧暦きゅうれき）では7月、8月、9月を「秋」と決めていました。そして秋の真ん中である8月は「中秋」

と呼ばれましたので、旧暦8月の満月を「中秋の名月」と呼んだのです。2024年は9月17日がその日（旧暦の8月15日）で「中秋の名月」にあたる満月です。

毎年このころの満月は高度が低く、楽な姿勢で長い時間見ていられます。高くないので地上の風景と合わせて鑑賞できるので、より美しく感じられたのでしょうか。

気づいていますか？ 季節によって月の高さは大きく変化します。月の高さをこぶしいくつ分の高さか、図のようにして測って日記に残し、冬休みになったらもう一度調べてみましょう。写真にとっておくのもいいですね。コンパクト・デジカ

メかスマホのカメラで、同じ条件で撮影しておいて、後で月の高さを比べます。「同じ場所で」「できれば満月の前後に」がポイントです。

